

手巻きの心臓 第二稿版（前編）

みちすすぎ

○時計メーカー・組立作業室

組み立て途中の機械式腕時計のムーブメント。心臓部であるテンプがはめ込まれ、台座ごと軽く揺すられるとテンプが拍動し、時を刻み始める。組み立てを行っていた深見吉彦（33）、それを優しく見つめる。

と、後輩の小林（23）に何か声を掛けられ振り向く。

× × × ×

腕時計を組み立てる小林。その隣で吉彦が、モニターに映し出される手元の拡大映像を見ながら助言している。

○同・更衣室（夜）

コートを羽織って帰る支度をした吉彦。左手の薬指に指輪をはめる。

○深見家・佐保の部屋（夜）

一戸建ての二階。両脇の壁が本棚で埋まっている。

窓辺の机には吉彦の妻、深見佐保（27）。線の細い体に長い黒髪。鉛筆で原稿用紙に文字を書き連ねていく。

原稿用紙の脇には腕時計。静かな空間に柔らかな鉛筆の音と腕時計のかすかな振動音だけが響き、佐保は集中した表情で書き続ける。

× × × ×

暗い廊下で佐保の部屋の扉を伺う吉彦。

扉下から漏れる明かりを見て、表情を和らげる。

× × × ×

自室で原稿を書く佐保、やがて手を止め、息をつく。

机に伏せ、腕時計に耳を寄せる。チツチツチツという心地よい音に聞き入りながら目を閉じる。

しばらくして、ほのかに混ざるピアノの音に気づく。目を開く佐保。

○同・リビングダイニングく台所（夜）

ゆったりとしたクラシックが流れる中、リビングに佐保が入ってくる。

コンポの前に座っていた吉彦、振り返り

吉彦「ただいま」

佐保「おかえり」

吉彦「(部屋の匂いを嗅ぎ) パスタ？」

佐保「(少し笑って) ハンバーグ」

× × ×

ダイニングで向かい合って夕飯を食べる吉彦と佐保。

× × ×

食後の台所。吉彦がドリッパードでコーヒーを淹れている。

佐保は照明を絞ったリビングで何か読んでいる。

吉彦、コーヒーを持ってリビングへ。佐保は手紙を読んでいた。

テーブル上にはほかにも数通の手紙が几帳面に並べられている。

吉彦「佐保」

と、佐保の分のコーヒーをテーブルに置き、ソファに座る。

佐保「(微笑み) ありがとう」

佐保は慈しむような表情で便箋を優しく畳み、丁寧に封筒にしまう。

手紙のどの封筒にも『柳サホ先生へ』とある。

○ショッピングモール・書店

吉彦、店頭で平積みの本を眺めている。ポップのついた『手巻きの心臓』

という本に目が留まる。著者は『柳サホ』。

一人の客が『手巻きの心臓』を手に取り、店内へ。

それと入れ違いに、佐保が紙袋を持って店内から出てくる。

吉彦「今、一冊売れたよ」

と、『手巻きの心臓』を見る。佐保、その視線の先に気づき

佐保「ほんと？ 見たかった(嬉しそうに笑う)」

○同・駐車場

吉彦の車に乗ろうとする吉彦と佐保。

女性の声「あらー、どうもお」

吉彦と佐保が振り向くと、近くに高齢女性の近藤がいた。

あ、と会釈する吉彦と佐保。

近藤「最近佐保さん見なくてね、元氣かしらーと思って、けど夜中でもよく部屋の電氣ついてるから忙しいのねーとか」

佐保、ぎこちない愛想笑いで相槌を打つ。

○吉彦の車・内

運転席に吉彦、助手席に佐保が乗り込む。
目を合わせる二人。吉彦、佐保の疲れた顔を見てふっと笑う。

○山・展望台

『展望台』の表示板がある。ひっそりとして吉彦と佐保以外誰もいない。
眼下には街が広がり、遠くの山々には雪が積もっている。
静かに雪山に見入る佐保。
隣に立った吉彦、その横顔に目を細める。

佐保「……きれい」

吉彦が佐保の髪の毛に触れる。振り向き、微笑む佐保。
それに吉彦もふっと微笑む。

○ホテル・宴会場（別日）

バシヤ、バシヤと光るカメラのフラッシュ。
『今読む小説大賞授賞式』と掲げられた壇上に慣れない様子で立つ佐保。
拍手をする大勢の人たち。マイクを通した司会の大きな声。
フラッシュの強い光に目を伏せる佐保。

○同・客室（夜）

佐保、窓から東京の街を見る。夜でも明るい。
手に持った腕時計を見て、リューズをそつと巻く。

○同・貸会場

記者「では、主にお仕事は自宅で……」

硬い表情で記者から取材を受ける佐保。カメラマンが写真をバシヤパシヤ撮ってくるのに、居心地が悪そうに体を縮こませる。

× × ×

取材の合間、疲れた様子の佐保。

地味なスーツ姿の女性編集者、園部（26）が何うように

園部「休憩、入れますか？」

佐保「（にこっと笑い）ううん、大丈夫」

× × ×

黒縁眼鏡の男性業界人が佐保と向かい合って座る。

佐保「お待たせしてすみません」

業界人「いえ。(笑って)小説家の先生だとかこういう長丁場、慣れてないでしょ」

曖昧に笑う佐保。

× × ×

佐保「(渡された名刺を持ち)映画化……」

業界人「ま、詳しいことはこれから。ネットでも流行ってますし、当たりますよ」

佐保「え？」

業界人「ご存じないですか? Outubeでも感想の動画いっぱい上がってますよ」

驚き、呆然とする佐保。

業界人「女性作家特有の繊細さ、今の時代ウケますよ!」

× × ×

園部「……あんまり小説を読まない人なんですかね」

取材が終わり、佐保と園部の二人だけ。

佐保「え？」

園部「いえ……あ、出発、十分後で大丈夫ですか?」

佐保「あ、はい、(腕時計を見て)大丈夫で……」

一瞬、動いていた秒針が止まったように見えて、言葉が切れる。

が、秒針はちゃんと動いている。ほっとする佐保。

○吉彦の車・内(夜)

助手席の佐保、黙って外を眺めている。運転する吉彦、それを見て

吉彦「疲れた?」

佐保「……(笑って)久しぶりだったから、ちよつと」

と、再び外を見る。雪がちらちらと舞い始めた。

吉彦「昨日から降り始めたよ」

佐保、ぼんやりと雪を見上げる。

○深見家・佐保の部屋

机で原稿用紙に向かう佐保。書く手を止め、横に置いていたノートPCでネットブラウザを開く。

トップサイトのニュース欄に『著名人も絶賛! 今読む小説大賞』という見出し。気づいた佐保、見出しを見つめ、そつとクリックする。

タレントやアイドルが『手巻きの心臓』を持った写真が何枚も現れる。みなどこか得意げで、『SNSでも話題』と書かれている。

佐保の顔が不安そうに強張る。

動画サイトを開く佐保。検索欄に『手巻き』と入力すると予測変換で『手巻きの心臓』が、さらにその下に『ネタバレ』『解説』等が付属した検索候補が表示される。

一番上の『手巻きの心臓』をクリックすると、動画がずらっと表示される。どれもサムネイルに大きく派手な文字で『涙腺崩壊』『徹底解説』などと書かれている。

佐保、そのうちの一つの動画をそっと開く。

と、女性配信者Aがうるさく声を張り上げながら

配信者A「もうね、ほんつとヤバイ！ まあじで感動！ なんか、心の琴線に？ 触

れるっっていうかあ——」

慌てて『戻る』ボタンを押し動画を閉じる佐保。

ショックを受けたように少し固まった後、別の動画をクリックする。

配信者B「え、みんなわかった？ あそこでこまりが出ていった理由。作者ははっ

きりと書いてないけど、あれ実は過去の匂わせで……」

タイトルに『衝撃の事実！』と入った動画で、中年男性配信者Bが驕慢な口ぶりで語る。佐保、啞然として画面を見る。

下にスクロールすると『そう、実は裏設定で……』『一般人はわかってない』『さすがの考察』等のコメントが並ぶ。

思わずネットブラウザを消す佐保。顔を軽く覆いながら暗く俯く。

○佐保の車・内（別日）

街中を運転する佐保。カーナビからバラエティ番組の音声聞こえる。

女性タレントCの声「あー……（笑って）私、ちよつと違うふうに読んでました」

赤信号で車が止まり、番組の映像が映る。スタジオに『手巻きの心臓』が置かれている。女性タレントDが高圧的に

女性タレントD「あれはね、嫉妬なの。若い子ってそうでしょ？ そういう常識、

十代の心理を前提にね、こういう文学は読むの。でないと——」

映像が子供向け番組に切り替わる。佐保がチャンネルを変えていた。

少し息が乱れ、苦しい表情。

○深見家・駐車場

車からスーパーの購入品を下ろす佐保。そこへ近藤が寄ってきて

近藤「ちよっと佐保さん！ 見たよー、すごいじゃない！ なんだっけ、あのな
んとかっていう賞」

佐保、目を合わせず気まずそうに笑う。

近藤「私も読んじやおうかな。あ、サインお願いしちゃったりして！ 知り合い
に話したび、みんなびっくりしてね」

○同・リビングダイニング（夜）

食事をとる吉彦と佐保。吉彦、疲れた様子の佐保を見て

吉彦「大丈夫？」

佐保がぼうつと吉彦を見る。

吉彦「なんか、結構色んなところで、盛り上がってるなって」

佐保、一間置いてから微笑み

佐保「予想外で、びっくりはしてる。たくさんの人が、注目してくれて……（俯
き、小さな声で）ありがたいこと、だよね」

○同・佐保の部屋（夜）

佐保、机で原稿用紙に向かうが、書かずに沈んだ顔でぼんやりしている。

脇に置いた腕時計を見る。淀みなく動く秒針。

それが突然、ぴた、と止まる。

どきつとする佐保。呆然としてると、再び秒針が動き出す。

ほっとする佐保。だがどこか不安げに時計を見る。

○時計メーカー・組立作業室

モニターにテンプとそれをいじるピンセットが映っている。

吉彦が顕微鏡を覗きながら作業し、隣で小林がモニターを見ている。

吉彦「テンプはまさに、機械式腕時計の心臓部だ。ここの調整が時計の精度に直
結するし」

冷静に、真剣に顕微鏡を覗く吉彦の目。

吉彦「ここが狂えば、時計が狂う」

○同・休憩室

スマホでニュースを見る吉彦。佐保の写真が添えられた『美人受賞作家の素顔』という週刊誌の記事を見つけ、険しい顔に。

○佐保の心象イメージ

暗い空間で、目元の見えない人影たちが塊になって話している。

人影1の声 「これまじ？ 正直引いた」

人影2の声 「いやこれ相手の問題じゃん。よく読めよ」

人影3の声 「売れる人ってやることやってんだね……」

その視線の先には佐保がいる。佐保、気味が悪そうにその場を離れ、目についた扉の中に逃げ込む。するとそこはレストランのような空間。

人影4の声 「はあい、次は手巻きの心臓ですよー」

フルコースの料理が出てきて、全て巨大なミキサーの中へ投入される。ミキサーの脇にいた人影4がスパイスを雑に振り入れ、スイッチを押す。料理は混ざり合い、ぐちゃぐちゃの塊に。フタが開いたミキサーの中に周りの人影たちが手を突っ込んで塊を食べ出し、満足気に笑う。

佐保、気分が悪そうに口元を押え、その場から逃げる。

人影5の声 「笑って」これ読んでないとか、にわかかよ」

テーブルで人影たちが『柳サホ』のメニューを見ている。

人影6 「は？ 新作から入った知ったかが」

と、人影5と殴り合いの喧嘩を始める。気づくとあちこちで取っ組み合いが起きている。さらに逃げていく佐保。

その先で、テーブルに着き料理を食べる人影たちがいる。

人影7 「てか、よはるはなんであそこで変な責任感出したの？」

と、フォークに刺した料理を、見ないまま振り捨てる。

人影8 「料理を食べずに皿を舐めて」つまりあれはこまりの性的衝動で」

人影9 「フォークに刺した料理を凝視し」これって作者の深層心理だよね」

恐ろしげにその光景を見る佐保。

人影7 「(また料理を捨てながら) え、てかこまりがはつきり言えばよくない？」

人影8 「(フォークを舐めながら) よはるはさあ、寂しい子なんだよ」

人影9 「料理を手づかみして」てかこれ、作者の実体験でしょ」

佐保、慄くように身をすくめ、後ずさる。

と、向こうのほうで青い封筒がひらりと落ちてくるのが見える。

はっとして駆け寄り、必死に封筒をつかむ佐保。『柳サホ様へ』とある。

ほっとしたように息をつき、中から便箋を出すと読み始める。

が、佐保の顔がだんだんと曇っていく。

手紙を読む声「(明るく) こんなに有名になっても私も嬉しいです！ 昔から知っててよかった！ 読んでない子にもお願いしてネットの読書ランキングを」

○深見家・佐保の部屋

青い封筒を脇に置き、机で便箋を読む佐保。その目に力はない。ゆっくりと、机の上に崩れ落ちていく。窓の外では雪がしんと降っている。

○同・台所

とんとんとん、と包丁で野菜を切る佐保。虚ろな目で手元を見ている。その視線が、野菜を押さえる手の指に集中していく。じっと自分の指を見下ろす、佐保の暗い目。とんとんとん、と軽やかな音は続く。が、その音が急に途切れる。佐保が包丁を置き、片手を押さえる。野菜に添えていた指から血が流れている。佐保、痛がる様子もなく、血を無表情に見る。

○同・リビングダイニングく台所(夜)

向かい合って食事をとる吉彦と佐保。佐保の表情はどこか暗い。吉彦「(佐保のほうを見て) 指、どうかした？」

佐保の指に絆創膏が巻かれている。

佐保「……野菜切って、ちょっと」

吉彦「包丁で？」

佐保「うん、でも軽くだし、大丈夫」

吉彦「そう……(佐保の様子を伺うように) そういえば、駅前にピザのお店できてたね。行ってみる？」

佐保「(目を合わせず) ……締め切りで、余裕なくて」

吉彦「そっか……あ、俺もこれから、帰り遅くなるかも。生産増える関係で……」

佐保、聞こえていないかのようにぼんやりとしている。

×

×

×

台所の流し前で、佐保から洗う食器を受け取る吉彦。

絆創膏を巻いた指に吉彦の手が触れ、佐保が思わず手を引く。

佐保「……今日はコーヒー、大丈夫だから」

と、部屋を出ていく。吉彦、閉まった扉を見つめる。

○同・二階廊下（夜）

コーヒーを持って佐保の部屋前に来た吉彦。扉をノックしようと構えるが、そのまま何か思うように固まり、やがて手を下ろす。吉彦、気にするように振り返りつつも、佐保の部屋前から去る。

○同・佐保の部屋（夜）

開け放った窓に顔を向け、机に伏せる佐保。外で降る雪を光のない目で見ている。

○ショッピングモール・書店

佐保、生気のない顔でふらふらと歩く。店頭に並んだ新刊本の前で立ち止まり、何気なく眺める。ある本の『心のねじを回したのはあなたでした』という帯の文句に目が留まる。その本を手に取り、裏のあらすじを読む佐保。顔が強張っていく。

○深見家・佐保の部屋

スマホを見る佐保。画面にはSNSの色んな人のポストが並ぶ。『これ某小説のパクリ……？』『見たことある設定ダナー』『リスペクトっていうんですよ』等のコメント。書店で手に取った本が机上にある。佐保、それを暗い目で見下ろす。

× × ×

園部の声「（力強く）編集部で対応等含めて、確認しますね」

佐保、スマホで園部と通話している。

佐保「（弱々しい声で）……お願いします」

園部の声「……先生、大丈夫ですか」

佐保「はい。締め切り、遅れてすみませんが……」

園部の声「いえ……（何か言おうとするがやめて）じゃあ、失礼します」

○同・リビングダイニング（夜）

リビングの窓から庭を見る佐保。台所の明かりだけをつけ、リビングは暗い。外は強い風の中を雪が舞っている。

玄関のほうでボタンと音がし、やがて吉彦が入ってくる。

暗い中に立つ佐保に気づき、どきりとする吉彦。

佐保「(振り向き) おかえり。雪、大変だったね」

吉彦「あ、うん」

佐保は台所に向かい、何事もない様子で食事の準備をし始める。

吉彦、ジャケットを脱ぎながら、気にするように佐保を見る。

○道

こんこんと降り続く雪。まつさらな雪が降り積もった田んぼに囲まれ、人も車もない中を佐保はスマホで通話しながら歩く。

佐保「(硬い表情で) ……それで」

園部の声「(言いくさそうに)うちとしましては、その……法的な面も含め、先方への対応等は一切考えていない、とのことですよ」

佐保が足を止める。

園部の声「確かに、類似点が多いですし、柳先生の作品を真似ているかといえ、明らかにそうだと思います」

佐保の口から白い息が漏れる。

園部の声「ですが、著作権侵害の実証って難しいみたいで……明らかにそうだろうっていうのでも、実際に裁判で認められるかは、また別、らしく……」

沈んだ目でそれを聞く佐保。

園部の声「先生の、嫌だと思うお気持ちも、わかります。でも……(わざとらしい明るい声で)それだけ、話題性があるってことですよ!」

佐保、ショックで目を見張る。

通話を終え、スマホを持つ手をだらんと下げる。

一面真っ白な世界で、佐保はぼつんと立ち尽くす。

○時計メーカー・組立作業室

ばき、というほんのかすかな音。

小林の声「あ」

顕微鏡を覗いている小林。隣で吉彦がその手元を映したモニターを見ている。テンプの中央に巻かれた小さなぜんまいが折れている。

小林「すみません、やっちゃいました」

吉彦「(笑って) いいよ、練習だから」

だが何か嫌な予感がしたかのように、吉彦の顔から笑みが消える。

前編終